

平成22 (2010) 年10月1日

第23号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀文化

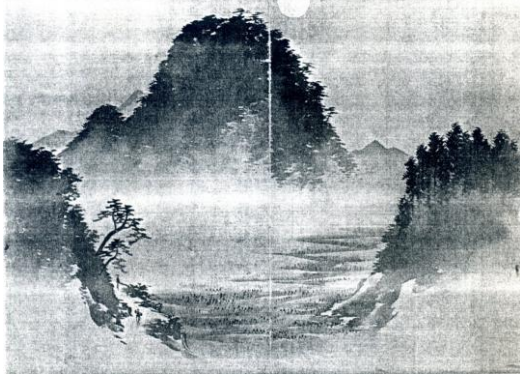
浦賀道

江戸時代の交通路

浦賀に奉行所が出来てから浦賀と江戸を結ぶ道を「浦賀道」と呼ぶようになった。

浦賀道と呼ばれているのは、東海道の戸塚宿から大船、鎌倉、逗子、葉山、衣笠公郷、大津を通り浦賀に通じるルートと、保土ヶ谷宿から金沢、追浜、田浦、汐入、大津で前のルートに合流し浦賀に至る2つの道がありました。

総に渡った際に通った古東海道の一部もこの浦賀道に重複する部分が多いように考えられています。一方、保土ヶ谷から金沢までは金沢道とも呼ばれていました。金沢から汐入を過ぎるまでは山越えで難所の連続であったことから、金沢と大津の間は船を利用することが多かったそうです。先の戸塚宿からのルートが浦賀奉行の着任の際などに利用され、江戸との正式交通路になっていました。



安藤広重 武相名所手鑑
浦賀道山中夜景

現在の矢の津坂から浦賀を望む

浦賀道の起点は西浦賀一丁目の精栄軒さん前になると思いますが、ここが西浦賀の中心地だったのでしよう。道路の起点には道路原標があったのではないのでしょうか。どなたかご存知のかたがいっぱいいます。

たら御教示いただけたら幸いです。

当時の浦賀道も今では道路拡幅や宅地造成などで無くなっていく部分もありますが、浦賀地区では浦賀郵便局あたりから南側は、ほぼ昔の道が残っているの、ここに、木戸や高札場を復元して町の活性化につなげることは夢でしょうか。

上の絵は安藤広重が武相名所旅絵日記の中で浦賀の入口、矢の津坂から見た浦賀方面の風景です。当時は人家も無く月の美しさに惹かれて筆を執ったのでしよう。

下の絵は、幕府が享保元年（一七一六）に作成した浦賀道見取絵図の一部です。

現在の浦賀駅あたりから東西浦賀に分かれ東叶神社までと西浦賀検校崎（当時）までが広い道幅で書かれています。橋や神社、民家、木戸などが克明に描かれてあり、非常に興味をそられるものです。

参考資料

- 浦賀ストーリー 山本詔一著
- 浦賀道見取絵図 東京美術
- 日本武尊の東征路と古東海道

多々良四郎著

歴史講座開催予告

平成22年度の歴史講座の開講を平成23年1月19、26、2月2、9、16日（水）に計画しています。

詳細は、11月25日付けの「広報よこすかお知らせ版」等でご案内する予定です。ご期待ください。



浦賀道見取絵図（浦賀）



歴史語りい座・浦賀二十

郷土史家 山本 詔一

●初鹿野奉行の時代●

天明七年（一七八七）8月、浦賀奉行に初鹿野（はじめの）伝右衛門が就任した。

初鹿野奉行は厳格な人柄とみえ、少し歪みかけていた奉行所の刷新を図るべく、矢継ぎ早に、与力・同心はもちろん、奉行所に携わる多くの人々を対象に注文をつけていった。

「船改め」のために入津する廻船は、燈明堂あたりで帆をたたみ、浦賀湊へ引き船によって、曳航されてくるのが通常のスタイルであった。

この引き船は誰でもできる訳ではなく、東西の漁師の仕事であった。引き船の料金は規定を設けてあったが「寒いだの、日暮れにかかっているのだ、雨降りだの言つては料金をねだる族がいる」と聞く、と言い、今後はそのような心得違ひをすることがないようにときつく申し付けた。

役人たちが町で買物をした時には、代金と引き換えに品物を渡すようにいい、そのことでとやかく言う様な者があれば、遠慮なく訴え出てきなさい、と言ひ渡した。

これは役人だけを攻める訳にはいかず、商人なかにも特定の役人を巻

き込む方法の一つとして、日頃のこうした行為に目をつぶって置く方が得策で、いざという時に役立つと思つている商人が多かつたことは否めない。

こうした商人の体質が、士農工商の身分の一番低いランクに甘んじなければならぬものであった。

次は同心の役付きの者に対して、新たな役に付いた時は役勤めをする前に、必ず、見習いとして、古役の者に三日間付いて、様々な伝達事項を受けてから、本勤務に付くよう指示をだした。与力も同心も少年のころから見習いとして奉行所勤めをしているので、どの部署に回されてもさほど緊張感がなく、職務につくことをみた初鹿野奉行からの苦言である。

この奉行が町場回りといつて、東西浦賀の町中を視察に来た時、新地町の一軒の家の前で止まることを命じ、供の役人に「この華美な建物は何か」と尋ねた。役人は「洗濯屋でございます」と答えると、「どこにも洗濯ものもなく、立派で華美すぎるので、取りつぶす」ことを命じた。浦賀で洗濯屋というのは、遊郭のことをいい、この時奉行の目に留まつたのは江戸屋半五郎の家であり、江

戸屋はこの事件を契機に遊郭を廃業し、自分は仏門に入り、俗世での罪滅ぼしにと、東浦賀の東林寺の入口に、「南無阿弥陀仏」の石柱を建て、西叶神社には手洗いの水盤を寄進した。



江戸屋半五郎が西叶神社に寄進した「嗽水盥」

初鹿野奉行の浦賀奉行に任期はわずか一年であつたが、残した足跡は大きいものがある。

◇蔵書◇

『江戸幕府大辞典』
編者 大石 学
発行所 吉川弘文館

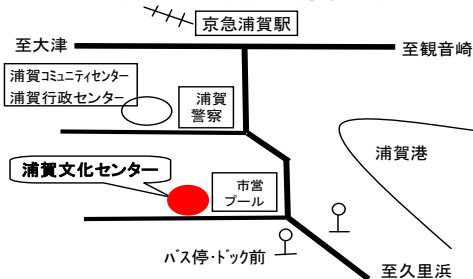
家康から慶喜迄二百六十五年にわたり、日本を治めた江戸幕府。最新の成果で描く概論と、職制・陣屋・儀式などの用語解説で、幕府の基礎情報を集めた江戸幕府のすべてがわかる『江戸幕府』百科の決定版といえる一冊。

～笑話一題～

青森、舞鶴、横須賀、呉と、仕事の関係で点々として来ましたが、やはり、住むにはこの横須賀が一番しっくりきます。気候や住みやすさもさることながら、毎日見る海岸沿いからの美しい景色や、その時々のお天気でガラッと変わる風景は、本当に生きていることを実感させてくれ、また、感動を与えてくれます。色々な土地でのすばらしさを味わいながらも、何故か横須賀に戻って来る度に第二の故郷に帰ったような懐かしさと安心感をおぼえる私です。皆さんも、改めて今住んでいる土地の良さを、ご自分のファインダーを通して見直してみたいかがでしょうか。また、いつもと違った横須賀が見えてくるかもしれませんね。

浦賀コミュニティセンター分館 (浦賀文化センター)

浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分



所在地: 横須賀市浦賀7-2-1
電話: 046-842-4121
FAX: 046-842-4121

今号より、紙面をA4判に変更致しました。
今後とも、ご愛読の程、よろしくお願い致します。